
楽園の引金

emanon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園の引金

【Zコード】

N7488E

【作者名】

emanon

【あらすじ】

今日もあたしは引金を引く、ハンマーがブライヤーを叩き、弾頭が頭蓋骨に食い込む。飛び散る脳漿、血液、他人がどうなろうが関係ない。あたしは幸せになりたい 感想、評価などよろしくお願ひします。

(前書き)

これがはコレイザのイメージ画です。<http://emanon98.sisland.to/index.html>

1、荒野

耳をすませば、どこからか聞こえてくるのは、銃声と悲鳴。

それが、未開拓の大地、ルーザーズ・コンティネント。

その煉獄の地をさすらう女が、行き着いたのは小さな樂園だった。

血と硝煙の世界の真実。

そして今日も引金が引かれる。

昨日も、今日も、明日も、ルーザーズ・コンティネントの太陽は変わらない。

誰彼の区別なく、瞬きほどご躊躇なく、あらゆるもの焼き飛ばす。

ただそれだけだ。

そんな独裁者が支配する荒野を一人の女性がズタ袋を担ぎ、黙々と歩いている。年齢は二十を少し超えたくらいだろうか。金色の長髪を高い位置で一つにまとめている。ほじけば腰まで届きそうだ。デニム生地のパンツに、男物のシャツという出で立ち。それは動

きやすさを重視した結果だろうか？ 普通はその上から田よりの外套をはあるのが普通だ。彼女の服装は炎天下の中を歩くにはいさか軽装過ぎる。

可愛らしさといつよりも凜々しい顔立ち、一切の無駄がない引き締まった肢体。それらは、一点の曇りなく研ぎ澄ませたサーベルのよう美しい。

しかし、白いシャツから透けて見える左腕には、幾筋も走る、醜い傷痕があった。それは遠い異国に生息するという、虎という肉食獣の模様に似ている。これだけの傷だ。その根源にどれだけの死線をぐぐつたのだろうか。

女の歩みが不意に乱れた。身体がぐらりと揺れる。彼女は耐え切れず膝をつき、前のめりに倒れこむ。灼熱が皮膚を焦がす。しかし、立ち上がるにも力がはいらない。

意識が薄れ、全てがどうでもよくなつてくる。

視界がぼやけ、白霧がかかるように背景が徐々にホワイトアウトしていく。

私はこんなところで死ぬのか……

女の顔に自嘲の笑みが浮かんだ。 ふん、自分にふさわしい最期だ。女は思つた。

今まで、數えきれぬほどの罪を犯してきた。神様といつやつが本当にいるのなら、この灼熱の大地を、罪を清めるという「地獄の業火」というやつの代わりにしたいのかもしれない。もつとも、神様なんていないし、そんなもので、少しばかり焼かれたところで、罪が消えるはずもない。

ふと、視界の端に数人分の人影が見えた。

砂粒ほどの大きさだが、離れているとはいえ、遮るもの無い荒野。倒れている彼女に気づき、こちらに向かってくるようだ。死臭をかぎつけ、食い散らかすハイエナみたいなものだ。彼女が死んだ後で身包みを剥ぎ取ろうというのだろう。

いいだろう、全てもつていけばいい

もとより、人は他者から奪わねば生きとはいえない。その対象が植物であるか、動物であるか、はたまた人であるかの違いはあるが、奪うということには変わりが無い。今回は自分が奪われる側に回つた。ただ、それだけの事。

そして、彼女の視界と意識は完全に途切れた。

2、違和

暖かさを感じた。「暑さ」ではない。安らぎを覚える「ぬくもり」だつた。これをいつまでも感じていきたいと思う。

自分は死んだのだろうか。

聖書はよく知らないが、ここは、「天の国」とやらだろうか。瞬きをする間にはそんな仮説は否定した。この世界に楽園なんて無い。神様なんていない。もし、そんな都合のいいものがいるとすれば、彼女の左腕にある傷痕はいったなんだというのだ。

そこまで思考がたどり着いたとき、混濁していた意識が完全に元に戻る。

ここはどこだ!?

一息に身体を起こす。どうやらまだ生きているようだ。

レリイゼはベッドの上に寝かされていた。あまり質のいいものではないが、清潔なシーツとマットだった。思えばちゃんとベッドで眠るのは久しぶりだ。

あたりを見回す。小さく、質素な部屋だ。ベッドのほかには、机が一つ、椅子も一つ、壁に向かい合うように置いてあるだけ。自身の身体を確認する。やけに風が通ると思ったら下着だけだった。ジーンズとシャツは脱がされてしまったようだ。

下着を着けたままだということは、助平心ではなく、治療のために脱がせたのだろうか。とりあえず、体は無事なようだ。ルーザー・コンティネントなどと呼ばれる掃き溜めに来たときにある程度

の覚悟はしているが、それでも、下衆に抱かれるのは嫌に決まっている。

とりあえずは、自分がどういつ状況にいるのかを知らなければならない。自分を介抱してくれたのだとしても、相手に何かの思惑があるだろ？もし、その思惑が自分の害になるようならば、早々に逃げ出さなければならない。

人の善意はまず疑う。それがこの最悪の土地で生きていくための秘訣だ。

レリイゼは服の変わりにシーツを身体に巻き、立ち上がった。少し眩暈がしたが、なんとか歩けそうだった。

窓から外を覗く。幾棟かの建物が見えた。木造で、粗末なものがほとんど。あまり発展していない集落と推測できる。

ふと、視界の端に動くものを見つけた。子供だった。子供だけで遊んでいる。無邪気な笑顔。

自然とレリイゼも顔がほころんだ。あんな、屈託の無い笑顔を見るのは久しぶりだ。

子供が遊んでいる姿も、本土ならともかく、ジー、ルーザーズ・コンティネントではめったに見ない。

子供は高く売れる商品だ。あんなに無防備な姿をさらしていれば、トーストがやけるよりも早く、売られてしまうだろ？それに加え「遊んでもらえる子供」自体が少ない。ここで生まれる子供のほとんどは、娼婦が産む父親が不特定の子であり、6、7歳程になつたら、娼婦宿か、小金持ちに売られてしまう。そして、自由を勝ち取らない限り、つまり、逃亡に成功しない限り自由はない。成人したとしても男は労働用、そして、女は欲望処理用に使われる。

ルーザーズ・コンティネントでは、弱者に人権は無いのだ。それに対し、この光景はおかしい。

レリイゼはそこで思考を切り上げ、窓の淵を離れると、先ほどまで眠つっていたベッドに向かつた。横になり、シーツを直す。

この際考へても仕方がない。殺す気ならば、こんなところに連れ

てくる前に殺していいるはずだ。自分をベッドに寝かせた人物には少なくとも殺意はないことが推測できる。それなら、とりあえず、成り行きに任せ、様子を見よう。ヒ、レリイゼは腹を決め、瞼を閉じた。休むのも策のうちだ。

「コン、コン

どのくらい瞼を閉じていただろうか。ドアがノックされる音が聞こえた。

「はい」

「あ！ 目が覚めたの？」

「よかつたじゃないか」 邪魔するぜ

「ちよつと、レディの部屋に気軽に入らないの。ここで待つてて

「まあまあ、いいじゃないか、役得、役得」

ベッドから身体を起こし、返事を返すと、元気な幼い声がした。続いて、成人の男の声、こちらも陽気な感じだった。

ドアが開き、トレーを持った少女と、軽薄そうな男が部屋に入ってくる。男はドアの近くで壁に寄りかかり、丸太のような腕を組む。少女を見守っているようだ。

少女はショートにした髪を揺らしながら、『とてとて』とレリイゼに近づく。反射的に身構えてしまつたレリイゼであったが、無邪気な笑顔を見て緊張が緩む。

トレーの上にはカップに入れられたスープとトーストが乗つっていた。

彼女は机の上にトレーを置いた。

「ねえ、ちよつと」

「あ、そうそう。悪いけれど、服のほうはもうちょっと待つてて。今、破れたところとか繕つてるから」

「そうじゃなくて……」

「あ、じゃあ。自己紹介。あたし、マリエ。そっちのおじさんはディス

陽気な感じの男性

ディスは軽快に笑いながら「おう」と手を

あげた。短髪で、スウェットから筋肉質の胸元が覗く。かなりの荒事をぐぐつてきたようだ。これ見よがしにヒップホルスター、ショルダーホルスターに銃をぶら下げていることからもそれがわかる。「挺拳銃を扱うには、相応の熟練が必要なはずだ。

「……私は、レリイゼ。ちょっと……」

レリイゼの顔に苦笑いが浮かぶ。

自分がここに寝かされている理由　　わざわざ寝床を与え、介抱してくれ、食事や繕い物までやつてくれる理由　　を聞きたかったが、自己紹介を返さなければ、礼儀に反する。

「レリイゼさん……ね、うん、ここに前」

「おい、マリエ。レリイゼさんにも話をさせてやれよ。聞きたいことがあるそうだ」

レリイゼの心情を察し、ディスがやんわりとたしなめた。

「あ、……ごめん」

「こちらこそごめんね。　　それで、聞きたいんだけど、私は、どうしてここに寝ているの？貴方達が私を助けてくれたの？　それから、その見返りに何を期待しているの？　最後に貴方達は何者？」

「ちよ、ちよっと、待つてよ。そんなに一度に答えられないよう」

マリエがしどろもどろになりながら言った。

「一つずつ、ゆっくりでいいから話してやれよ。　　何をするこ

しても、まずは状況確認だものな」

ディスが言った。後半はレリイゼに対しての言葉のようだ。『何を』の部分を意味ありげに強調していたが、今は気にしないことにした。

「じゃ、一番初めの。『どうしてココにいるのか』って質問からえつと、仕事の帰り道で、レリイゼさんが原っぱの真ん中でいい感じにローストされていたのを見つけて、んでもって、手当てしようと思つて町まで連れてきたの。あ、そうそう、どうして、あんなに軽装でいたの？　そんなんじゃ倒れて当たり前じゃない」

「まったくだ。そんなにハゲタカの食卓に上りたかったのか。どう

せなら、オレのベッドに上つてくれよ。ちゃんと味わつて食べるからよ」

「あ、気にしないでね。この人、いつもこんなんだから」

「一人でなかなか笑えない冗談を言つてくれる。そんなことよりもこちらの質問に答えて欲しいものだ。話が進まない。」

「……まあ、出発したときにはちゃんと外套を羽織つていたのだけれど、ちょっといろいろあってね」

レリイゼはそういうつてごまかした。別に説明することでもない。そんなことはどうでもいい。最も重要なことを聞いていない。

「で、私に何をさせるつもり?」

「はい?」

マリエが不思議そうに瞬きをする。

「とほけてもしようがないでしょ?」

「貴方たちが見つけた私は無防備な状態だつた。殺して死肉を食らうことが出来た。でも、今、私はこうして生きている。わざわざ手当でもされてね。見返りがなければ、労力を裂く理由がないじゃない」

「そんなの、倒れている人がいたら介抱するのは当たり前。お酒を飲むと酔っ払うくらいにね。自分がそうなつたときに助けて欲しいから助ける。普通でしょ?」

言つている意味がわからない、というニュアンスを込め、マリエが言つた。

「ありえない……」

レリイゼは思考の中でマリエの言葉を否定する。そんな馬鹿な事はあるものか。子供の頃 父が生きていて本土で悠々と暮らしていたころにはよく教えられた事だ。しかし、そんな倫理はココでは馬糞にたかる蠅ほどの価値もない。そんな下らないお題目に従つた日には、よつてたかつて身包みはがされ、裸のまま荒野のど真ん中に放り出されるのがオチだ。笑い話にもならない。

「つて、外から来た人にとつてはなかなかわからないよね。ま、そ

のうちわかるよ。『Hは良い所だつてね。そんなことよりも、持ってきたスープ食べてよ。あたしがつくれたんだよ。ね、ね、お腹すいでるでしょ』

マリエがスープ皿を差し出して言つた。裏表のない笑顔と善意。しかし、レリイゼは疑わないではいられない。

「食べてやつてくれよ。心配なら、味見でも毒見でもしてやるつか？」

ジイスが言つ。苦笑いを浮かべていた。

「ジイスにはあげないもん。味見、味見つて言つて全部たべりやつんだから。味なら……」

スプーンに少し掬い、舐めた。

「ほら、味付け完璧」

再び、レリイゼに皿が差し出される。先ほど、マリエが舐めたのでおかしな薬が入つていることはないはずだ。傷がある左手でスープを、右手でスプーンを受け取ると、おそるおそる口に運んだ。

「……おいしい」

そのスープはとても温かく、優しかつた。マリHの善意、レリイゼは疑つた自分を恥じた。

「でしょ、でしょ。もつと食べてよ」

食べ始めたら止まらなかつた。なにしろ、倒れるまで歩き、そりに、倒れてから何も食べていないので。スープ皿はあつという間に空になつた。

3、安らぎ

あれから、一週間程、レリイゼは未だここでの生活を続けていた。確かに、『Hは『いいところ』だった。樂園と言つてしまつてもいいかもしない。争いはなく、暖かい。人も死なない。盗みすらない。

ここは町といつよりも、本土にある『孤児院』に近い。（もちろん

ん、ルーザーズ・コンティネントではそんなものはないが）大人はジイスだけで、後は十歳から十五歳くらいの子供達が十人ほど。荒野で狩をしたり、皮革を加工し売りさばいたりして生計を立てている。それで生活が成り立っているのはわかつたが、まじめに働いている子供を子供を尻目にジイスは毎日寝てばかりいるのが気になつた。ただの怠け者ということか、それとも何か理由があるのか。

建物はこの人数で建てたとは考えにくい。おそらく、何らかの理由で人がいなくなつた街を流用しているのだろう。使つている家屋よりも空き家のほうが多いのも、そう考えれば納得がいく。

それにしても、どうしてココはこんなにも平和なのだろうか。こんなに平和でよいのだろうか。ふと、そんなことを思つてしまつ。

「レリイゼさん。さつさと捌いちゃつてよ。今日はチキンのスープにするんだから」

「はいはい」

マリエがレリイゼに文句をつけた。彼女は最年長のようだ、ジイスとともにリーダーシップを取つてゐる。

そんな彼女は二ワトリの羽をむしってゐる。むしり終わつたら首を切り、逆さに吊るす。その血抜きまでの工程が彼女に割り振られた仕事だ。血を抜くわけだから辺りは血なまぐさい臭いで満ちている。本土ではグロテスクといわれるかもしれないが、ここでは誰でも当たり前に行つう作業である。

吊るしてしばらく放置し、血が抜け切つたところでレリイゼの出番だ。丸焼きにするならともかく、干し肉にするにも、料理に使うにも解体しなければならない。

レリイゼは愛用のハンティングナイフを取り出し、筋肉、内臓、骨を分けていく。骨や腱の継ぎ目を正確に狙うのがコツだ。

レリイゼは見事なナイフ捌きで見る間に解体を終えていく。

「レリイゼさんつて、ホント、ナイフ使うの上手だよね」

「そう？ ありがと」

「どこかで練習したの？」

「以前、ちょっとね」

左腕の傷痕が疼いた。

「あ、いいたくなればいいよ。ココでは昔のことを聞くのはあまりいいことじゃないから。左腕の傷痕、みてるだけで痛々しいもの。そういえば、ココに住んでいる子供達はどうしてここにいるのだろうか。まさか、全てジイズの子供というわけでもないだろ。みんな、言いたくないような過去を持つていてるかもしれない。

「まあ、痛くないといえばウソになるわね」

レリイゼはそういうてごまかした。

「私もね私もね。昔の大きな傷があるの」

マリエはそういうと、作業の手を止めた。

「そんな、別に言わなくていいわよ。それよりも、早く仕事を片さないといけなかつたんぢやないの？」

「ほらほら、ココ、ココ」

マリエはレリイゼの言葉を例によつて笑いながら聞き流すと、腕をまくつた。レリイゼは仕方なしに露出した腕を見る。

「……」

レリイゼは息を飲んだ。それほど、無惨な傷痕だった。

か細い手首に紫色の蛇が巻き付いているかのように痣が出来ている。さらに、痣周辺の皮膚が奇妙に引きつれている。

「なかなか凄いでしょ？ すっごく痛かったの、コレ」

笑いながら まるで、子供が自分だけの宝物を見せるかのよくな笑みを浮かべるマリエ。レリイゼは愕然と言葉を失う。

そんなレリイゼをおもじろがるかのよつ、マリエは様々な角度から傷痕を見せつける。

「物心付いたときからね。ずっと、ずっとね。無理矢理働かされていたの。ここに住んでいた連中にね」

笑いながら過去を語るマリエ。レリイゼは『感いながらも、口を挟む間はなく、黙つて聞いている他無かつた。

「昼間は雑用。夜は『悪戯』。よくある話かな。あ、でも、こんな

傷はそうそうないよ。鎖をね、手首に絡めて留めましたした後でね、鎖を火で炙るところになるんだよ」

声のトーンは変わらない、しかし、笑みが徐々に崩れる。無理も無い。それでも、いかな理由からか、マリエは話すのをやめない。

「熱い鎖が体重で手首に食い込んで、火傷がグチャグチャになつちやうの……痛くてね、まるで、トラップに脚を挟まれたウサギみたいに、びちびちつてのたうつ私を見て、笑いながらお酒を飲むのね」言葉に嗚咽が混じり、笑みは今にも崩れる直前。

「もう、いいよ。なんのつもりか、知らないけど。もう話すのやめてもらえない？ こつちまで辛くなるじゃない……」

堪え切れず、強引に話を打ち切る。独白は途切れた。マリエは、声を上げ、しゃくりあげながら、泣きはじめる。

突然、生い立ちを語られ、さらに大泣きされたレリィゼはどうしていいかわからず、呆然とするほかなかつた。

どうしていいかわからない数秒が経つた後、とりあえず、マリエを落ち着かせようと考えたレリィゼは、彼女の肩を抱き、背中をする。彼女も、赤ん坊のように無意識に手を伸ばし、レリィゼにしがみ付き、泣き声をあげ続けた。

どのくらいの時間、そうしていただろうか。

「「めん。ありがと」

そういう、マリエはレリィゼから離れた。まくりあげた袖を戻し、乱暴に涙を拭うと「よしつ」と両手で自分の頬を叩いた。

「よくわからないけど、落ち着いたかしら？」

「うん、なんとかね。いきなり「ゴメン。でも、もうちょっと話をする。そんな辛い毎日だつたんだけどね、ある日、ジイスが連中をやつつけて、私を助けてくれて、今の私は、平和で幸せな日々をすごしています。これで、オシマイ」

彼女は、おどけるように過去の話を締めくくつた。

「それで、どうして、そんな話をわざわざ私に？ それも、泣いてまで」

「ほんと、『メン』。練習に使わせてもらつたの。クサに言葉で言つて、『過去の克服』つてやつのが、マリエは一寸言葉を切り、レリイゼに背中をむけ、歩きながら続きを話し始める。

「このこの過去つて誰にでもあるじゃない。忘れない過去。消し去つてしまいたい過去……。アタシ、そういうのから逃げ切らダメなんだと思うの。もちろん、逃げて、忘れて、消し去つてしまつまつが簡単だし、ラクだけど、それじゃダメなんだよ。なんか、負けた気がするもの。アタシ、結構負けず嫌いなの」

「そんな過去、忘れてしあえぱいい。やうすれば痛みも感じないし、簡単だわ。つまらない意地や、自己満足で、古傷を引っ搔き回すことは無意味よ。そんなものはただの自己満足に過ぎない」

つぶやいたその言葉はマリエに向けてのものだらうか。それとも、己に対する言い訳か。

レリイゼは、気がつけば、自身の 傷だらけの左腕を見ていた。
「やうかもね、でも、アタシは、イヤなの。なんか、ちやんと決着をつけないと、寝覚めが悪いの。んで、や、このこのことを、脈絡も無く、誰かに笑いながら、『冗談みたいに話すことが出来たら、自分の中で決着が付く。そんな気がするの。それで、また、試してみたわけ……でも、まだまだだつたみたい。ダメダメだね。アタシ」「いいえ、そんなことはない、と思うわ。途中まではできたんだし。貴方がそう考えるなら、そうすればいい。でもね、マリエ、コレだけは言わせてもらつわ」

彼女は一度言葉を切ると

「こきなり、そんな痛い話を打ち明けられる身にもなりなさいつまつたく……こきなり何を言ひ出すかと思えぱ……」

レリイゼは、言ひ終わるとナイフをにぎり、解体作業を再開した。

「あははは、やつぱりびくつした？ 『メン』

ふと、レリイゼの手が止まる。

「ねえ、マリエ」

「ん？ なあに？」

「自分の手にナイフがあつて、目の前にその傷を作った連中が吊るされていたら……、貴方は復讐する？」

横縞に引かれた傷が疼く。

「復讐つて、殺しちゃうかどうかってことでしょ？」 うん、どうかなあ。アタシ的には殺したくないな。それって、まだ過去を引きずつてることじゃない？ ま、実際になつてみないとわからぬいけどね。顔を見た瞬間、飛びかかるかもしれない」

マリエはコロコロと笑つた。

「そう……」

「ほらほら、そんなことよりも、早く仕上げて料理始めないとみんな帰つてきちゃうよ」

彼女はそういうと、先ほどのことなど無かつたかのように作業を進めた。

「でね、聞いて、聞いて。レリイゼさんたらね」

「町」の全員がテーブルについている。子供たちが十人、それにジイスとレリイゼで十二人だ。四角のテーブルにの四辺に二人ずつ座る。レリイゼにとつてこの人数で食事をするのは始めてだ。

中心にメインである肉料理の大皿と、小麦を練つて焼いた主食。それからスープの寸胴があり、皆が我先にとフォークやスプーンを伸ばし、自分の皿の中に確保していく。

「ナイフを使うの、すつごく上手いの。でもね、料理は笑えるくらい下手なんだ。どれくらいかっていうとね、ね」

マリエの言葉に皆がそれぞれ相槌を打つ。この話のオチを待つているようだ。その他にも食器がぶつかる音、咀嚼する音。様々な音がする。賑やかで穏やかな食卓がそこに在つた。

「スープ作るときに、『ダシをとつて』つていつたら、出し殻の腿

を拾つて、肝心のスープの方を捨てようとしたの。「うん、あと声をかけるのが五秒遅かつたら、スープの無いカラカラの夕食だったね」「そりや、ファインプレイだつたね」「あつははは」と、様々な反応が返つてくる。話題のメインは最近、町での生活を始めたレリイゼだ。はつきりいつてオモチャのようにいじられている。

「ふ、ふん。料理なんて干し肉が出来ればいいのよ
むくれるレリイゼだつたが、目は笑つていた。

『いいところだな』

心から思つた。荒野で独り水で干し肉を流しこむ食事を続け、忘れてしまつた安らぎを思い出させてくれる。

笑顔で満たされる食卓。ふと、周りを見渡す。十一人分の笑顔がある。

昼間のマリエの言葉から考へると、皆、忘れたい、悲惨な過去を抱えながらも、寄り添い笑つてゐるのだろうか。

『樂園というものがあるとしたら、それはこいつひとつこのなかもしない』

そんな風に思えた。

「ああ、そうそう、レリイゼ」

ジイスが唐突に話題を変えた。

「飯が終わつたら、ちょっと付き合え」

「おつ兄貴も隅に置けないね」「レリイゼお姉ちゃん氣をつけてね、コイツただのエロオヤヂだから」

言い終わつた直後、周りの子供達からいっせいに茶々が入る。それらを彼は笑つてごまかした。

『いいけど、何の用?』

「ちょっとばかしな、大事な話があるんだ。そう、大事な」

答えをはぐらかすジイス。軽い言葉と雰囲気、しかし、彼の瞳は真剣だつた。

4、ジイス

昼間の暑さが嘘のように夜の荒野は冷たかった。太陽はいない。代わって月が静かに大地を照らしている。

ジイスの後ろ、四歩分ほどの距離を開け、黙々と付いていく。彼はレリイゼに何の用があるのだろうか。子供たちが言うような事か。いや、おそらくは違う。

密かに腰に下げたナイフに手をやる。この距離、先に仕掛けられたとして、ジイスが銃を抜いてこちらを向くのが早いか、レリイゼが間合いをつめ、喉元を掻き切るのが早いか……。危害を与えるつもりならば容赦しない。

レリイゼは覚悟を決めた、殺す覚悟を。

どれほど歩いただろうか。町が拳くらいの大きさくらいになつた時、ジイスはおもむろに歩みを止めた。しかし、振り向きはしない。

「アンタ、マリエの過去について聞いたか？」

声のトーンは変わらない、しかし、どこかおかしい。

「ええ、貴方が、奴隸のように扱われていたマリエを助けた、つてここまでね。大したヒーローね」

「まあ、大筋は事実さ　　あの町はな、半分がマリエと同じ境遇、残りは町の噂を聞いてどこからか逃げてきた。まあ、弱者の寄せ集めみたいなものさ」

「この世界でよくそんなことが出来たわね、ここでは弱者は常に強者の食料。いつ奪われてもおかしくないわ」

「……それはなッ！」

刹那、ジイスの右腕がホルスターに伸びた。反応し、レリイゼが奔る。

閃き。一瞬の攻防

二人は互いに腕が届く位置に静止していた。

レリイゼのナイフは手首」とジイスに掴まれ、ジイスのリボルバ

一にはレリイゼの手が伸び、回転式の弾装が抑えられている。リボルバーはこの部分を抑えられるとトリガーを引けなくなる。銃を相手にする、初步の知識。

静寂。否、互いの筋肉が小刻みに震えている。。

それは拮抗状態だつた。女性ゆえ、腕力に劣るレリイゼが不利にみえるが腕全体を押さえつけねばならないジイスに対し、彼女は弾装を回すメカニズムさえ抑えればいい。

筋肉の塊のようなジイスと華奢に見えるレリイゼの間でも、互角の勝負となる。

「くつ……なるほど、貴方がこいつやって、町に近づく連中を消して、あの子達を守つていいのね……」

「アンタが寝てる時に殺つてもよかつたんだがな、あんたを介抱したマリエに悪くてな……ツ」

会話を交わす間にも双方ともに、力を緩めない。

「なかなかやるじゃないか……左腕の傷を見たとき、ヤバい予感がしたんだ。やっぱり、寝てるときに殺つとくんだったぜ……」

肉、骨が軋む。

「勘違いしないで、別に貴方達に危害を加える気なんてこれっぽっちもないわ」

「そんのは関係ないね」

馬鹿にしたような口調。

「先手必勝。やられてからじや遅いんだ。自分に近づく暴力はだれかれ構わず消すに限るツ」

ジイスは右腕のリボルバーを離し、もう一挺のリボルバーを引き抜く。

しかし、レリイゼの方が速かつた。

彼の動きが終わるまでに体重の乗った回し蹴りがジイスの右腕を捕らえた。体勢を崩すジイスに首筋に冷たい刃があてられる。

「これで、チェックメイト、ね」

ジイスは言葉を失い、膠着する。

カタ、カタカタ。カタカタカタカタカタ 。

何かが震える音。震えているのはジイスだった。

「」、殺さないでくれ。頼む」

「貴方……？」

先ほどのやり取りとは別人のように、歯を鳴らし、恐怖に憑かれる。

「言つてるでしょ。私は私に敵意を持たない限り、危害を加えない。貴方が先に抜いたのよ」

レリイゼは彼の首筋からナイフをはずした。ジイスは安堵から地面にへたり込み、何度も深呼吸を繰り返した。

「さっきまでの迫力はどこへ行ったの？ 貴方だつて、今まで何回も命のやり取りをしてきたんでしょう？ 情けないヒーローね」

「そんなこと言つてもな、怖いものは怖いんだよ。自分の周りにいる暴力が怖いんだ。いつ自分が死んでもおかしくない。だったら、殺さないといけないだろう」

「ふん、今さらかつこつけてもしかたないわよ。ほら」

レリイゼは手を貸してやる。ジイスは少し躊躇したが、その手を取り、立ち上がつた。

「……ダサイとこ、見られちまつたな

「別に、そんなことない」

そう、誰だつて怖い。死ぬのは怖い。別にジイスが特別臆病といふわけではない。一部の例外を除いて。

気がつけば左腕の傷痕をなぞつていた。

「さてと、話は終わりかしら？」

「ああ。悪かつたな。オレもアンタくらいの度胸があれば、こんなことしなくてよかつたんだが……」

「もう、いいわよ。 それより早く帰りましょ」

レリイゼは自然にその言葉を使った。全くの無意識だった。

「そうだな、帰るか」

少々、荒れたが話は付いた。皆のいるところへ戻ろう。そう思い、

歩を町へ向けた。

おかしい、明りが付いていない！？

「ねえ！ あれって」

「ああ！ 走るぞ。畜生ッ！ 迂闊だった」

眠るにはまだ早い、いつもなら、生業の軽作業をやつている時刻だ。今日に限つて、眠くなつて消灯してしまつたのか？ いや、ここではそんな可能性よりも別の可能性のほうが高い。それは……考えたくは無い、考えたくは無いが。

何者かの襲撃を受けている可能性だ。

5、襲撃

俺は町のそばで馬を降りた。後ろを走つていた相棒もそれに倣つた。

「なあ」

「ああ、わかってる」

この町はしばらく前にゴーストタウンになつたと聞いた、しかし、遠めに見たとき明かりはついていた。町全体ではなく、一軒、二軒程度の明かりだつた。おそらく、行き場の無い流れ者が勝手に泊まつているのだろう。よくあることだ。

しかし、その明かりは今は消えていた。そう、気づかれているのだ。俺たちが近づいてくるのを知り、明かりを消した。この町にいる連中は俺たちの存在を知つてゐる。逃げ出したのか、それともどこかに隠れて攻撃の機会を狙つてゐるのか。

前者ならばいい。しかし後者であれば……。

町のほうを見る、暗闇。真つ暗だ。恐怖を覚える。

「ここはやばいんじゃないか？」

俺は駄目で元々の提案をしてみた。

「馬鹿野郎、干からびてえのか」

そうなのだ。強引な手段でも金と食料を得ない限り、干からびる

しか道はない。

俺は、自分の不運を呪つた。

『負け犬の大陸』まで流れてきても、他人からかすめ取るしか方法を知らない。強いものの下に付くことしか知らない。

いや、違うな

運が悪いんじゃない。自分が悪い。何の能力も無いのが悪いのだ。
くそったれめ

結局のところは一本道。行くしかないのだ。俺は頭を振り、恐れを振り払つた。流れ者が居たとしてもこつちは一人。殺れない人数じゃないはずだ。

俺はヒップホルスターからリボルバーを引き抜いた。ヘタクソだが、一メートルくらいなら動いていても当たられるし、脅しや牽制くらいにはなる。

相棒のほうを見る。同じく銃を抜いていた。眼で合図を送り、俺が先行し、相棒がバックアップに付いた。

全身を神経にし、進んでいく。金目のものを、ほんの少しでいい。それでボスには言い訳ができる。

幸い、月がでているので明かりが無くともなんとか見える。明かりをつけなくていいのはありがたい。そんなことをすれば格好的になるからだ。

とりあえず、目に付いた家屋に近づく。ドアノブに手をかけた。後ろに居る相棒に合図を送ると、『一、二の三』でドアを開ける。内部に向かつて銃を構える。相棒もそれに倣う。
誰もいない。

危険がないことを確認し、一息つく。

しかし、俺の行動はあまりに迂闊だった。

不意に痛みが走り、意識が飛びかかる。

後ろから殴られた。と理解したのは、床に頭を打ち付けてからだつた。

バックアップはどうしたつ！！

と思つたら、再び殴られる。痛えツ 無意識に頭を守るよツヒ
づくまる。ドカドカと足音がした。

「逃げたほうは放つておいてツ！ こいつを逃がさないで…」

子供の、女の声。そうか、相棒は逃げたか。所詮、そんな関係だ。

再び、打撃。打撃。打撃。

角材のようなもので滅多打ちにされる。 クソツ。ひでえ女だ。
頭にヌルリとした感触。 畜生！ もうやめてくれ。
痛すぎて、何がなんだかわからない。 やめてくれ、頼むから。
やめてくれ。やめてくれやめてくれやめてくれ……。

レリイゼとジイスが帰つてきた時には、全ては終わつていた。
どうやら、こいつことは今までに何度もあり、何らかの策を講
じていたようだ。

子供らがうずくまる男を囲んでいる。手には血が付着し、所々が
ひしゃげた角材。男を見る、うずくまつたまま動かない。気絶して
いるのだろうか。破れた服からは青く変色したな内出血部が見え、
頭から出血している。まるで銃のメンテナンスに使うボロ布のよう
だ。

「どう？ アタシたちだけでやつたんだよ？」

マリエがガツツポーズを作つた。満面の笑みだ。しかし、頬に返り
血を浴び、笑うマリエにレリイゼはやりきれなさを感じた。

いや、レリイゼもわかっている。彼女達は自分に害をなす『敵』
を退けた。ただ、それだけのことだ。手加減など出来ない。いや、
手加減など意味が無い。結局のところ、人は金と食料が無ければ生
きてゆけない。その一つに限りがある以上、自分を生かそうと思え
ば殺すしかないのだ。そう、この子供たちも、この町に来るまでは
その理屈で奪われ、虐げられてきたのだ。因果応報、当たり前のこ
と。

そう、わかつてはいる。しかし、いつまで経つても慣れることが出来ない。

「ね、ね。レリイゼさん、ちょっとコイツ縛るの手伝って
マリエは毎晩の笑顔のまま、ロープを取り出し、レリイゼに渡した。

6、腰抜け

ランプの炎が男の皮膚を焼いた。

月夜の静寂を打ち破る男の悲鳴。酷く耳障りだ。

闇に沈んだ意識が無理矢理引き起こされる。肉の焦げる嫌なにおい。

「よお……眼が覚めたかい？」

ジイスが言った。

部屋の真ん中にロープでがんじがらめにされた男が転がっている。先ほど捕らえられた男だ。レリイゼは少し離れた場所に立っている。「起き掛けに悪いんだが、ちょっと聞きたいことがあってな。悪いが、ちょっと付き合つてもらうぜ。潔く答えればよし、答えなければ……まあ、わかるよな？」

そう、言つまでもなく、答えるまで、拷問が続く。

カタカタと音がする。それは男の奥歯が鳴る音だ。竦み上がり、怯える男とは対照的に、ジイスはレリイゼや子供達と話すような口調でにこやかに話しかける。

「手近なところからいこつか　名前は？」

「レ、レイブ」

男　　レイブは震えながらも何とか声を発した。

「なかなか、素直でいいな。この調子で頼むぜ。目的は？」

「……金、だ」

「まあ、そうだろうな。じゃあ。本題だ。お前と、あの逃げたやつ

の他にチームは居るのか？」「

もし、チームだとすれば、逃げた男がこの町の情報　捕らえやすく、金になる子供が多く居ることや少しなりとも蓄えがあることをボスに知らせるだろ？。そうなれば、再び狙われる公算が高くなる。おそらくそれを確かめるための問であら？。レリイゼはそう推測した。

「い、い、居ねえよ！」「

裏返つた声だつた。

「そうか、そうか……」

ディスの腕がそばに立てかけてあつた角材に伸びる。

じついう場合、『居ない』と答えるに決まつてはいる。もし、チームが居るとしても、素直に『居る』と答えれば、構成員、ネグラなどを聞かれ、再び答えるまで拷問が行われる。そして、それに答えれば、裏切り者だ。ここから無事に逃げおおせたとしても死ぬよりつらい目に合わされ、惨たらしく殺される。

つまり、どのように答えようが、拷問は行われる。『居る』と答えるか、継続不能になるまで。そして、彼に残る生き残りの芽は砂粒よりも小さい。

「困るな。正直に答えてくれねえとよおつ！」

ディスが角材を力任せに振り下ろす。

「ぐうッ！　ギャうッ！」

レイブはたまらず、悲鳴を漏らした。皮膚が破れ、真皮がむき出しになる。

「レリイゼ、ちょっと塩とつてきてくれよ。ありつたけ、な」
それがどのようなことに使われるのか、レリイゼは知つてはいる。しかし、それはこの町を守るために必要なことだ。

レリイゼは顔をしかめながら「ええ」とうなずき、部屋を出た。後ろからは骨に響く打撃音と、男のうめき声、悲鳴が途切れると無しに聞こえていた。

使つてこるキッチンがある家屋　子供たちが眠つてゐる家屋に

入り、塩の塊、岩塩（海がないため、ここでは岩塩が主流だ）を手に取る。

壁と距離を置いても悲鳴は聞こえてくる。だといつのこと、子供たちが眼を覚ます様子はない。もつ、慣れてしまつてこるのでない。

抱えられるだけ抱え、拷問部屋に戻る。

床は血に染まっている。凶器もだ。ジイスの息が荒い。よほど殴つたらしい。

縛られたまま、なすすべもなく呻くレイブ。まるで、蛇に丸呑みにされている最中のネズミのようだ。

「ノルマ」

ジイスは言いながら、塩の塊を受け取り、躊躇なくレイブのむき出しおの真皮に擦り付ける。

「GYAAOOOOOOOOAOA...」

レイブのめちゃくちゃな悲鳴があがつた。喉が潰れるほど悲鳴だ。瀕死の芋虫のようだ。無様にのたうつ。

レイブの形のいい眉が歪む。とても正視できるようなものではない。

男の声が割れ、枯れ果てたころ。男はチームであることを認めた。「ようやく、次の質問だな。じゃあ、ボスの名前をしゃべつてもうおうか」

ジイスの口調は相変わらずだ。

もしかすると、拷問を楽しんでいるの？

思つたが、口には出さない。

レイブはひゅうひゅうと荒い息を吐きながらもすぐに口を開いた。チームであることを認めてしまつたのだ、こまさらシリカを切つても仕方がない。

「ギィル、だ」

ジイスの様子が変わる。その名を聞いた刹那、彼の表情が崩れた。

「ギイル、だと」

「それって、何者なの？」

ジイスの様子にただならぬを感じ、問うレリイゼ。しかし、彼はその間に

答えない。代わりに、床に突っ伏しているレイブの胸倉を掴む。レリイゼの腰ほどもある上腕が隆起し、レイブの身体が持ち上がる。「テメエッ！ アイツは今何してる！？ アイツはいつ来るんだ？ どっちから来るんだッ？ ヤサは？ オイツ！ 答えろおッ！」

レイブが床に叩きつけられる。頭からだ。

「おらッ！ 答えろッつてんだよッ！ ああ！？」

怒りに取り付かれた表情で、倒れている彼をとろかまわず踏みつける。頭、首、ボディ。何度も、まるで何かに取り付けられたように。

「ちょっとッ！ 待ちなさいッ！」

慌ててレリイゼが凶行をとめようと、後ろからを羽交い絞めにした。しかし、力、体重ともにジイスが圧倒的に勝っている。レリイゼの華奢な身体では押さえきれるものではない。力任せに引き剥がされ、吹っ飛ばされる。

ジイスはなおも狂ったようにストンピングをやめない。

「クソッ、クソッ、答えろよ！ おい、答えろおッ！」

レリイゼは悟った。コレは怒りではない。恐怖だ。ジイスは『ギイル』への恐怖に取り付かれている。怖いから、『ギイル』に対しても有利になる情報を求めている。

レイブの肉がぶつかる、骨がきしむ。血を吐く。内臓までいっているかもしれない。

彼は既に白眼を向き、気を失っている。いや、下手をすれば……。

「待てって言つてるッ！」

ジイスに向かい、加速、体重を乗せ容赦のないハイキックを放つ。頭部にクリーンヒットし、今度はジイスが吹っ飛んだ。いかに、レ

リイゼが軽くとも、スピードを乗せれば、大の男でもこうなる。
倒れたジイスがギクシャクと身体を起こす。狂気は既に去つてい
た、しかし、代わりに絶対的な恐怖が彼を支配していた。手足は振
るえ、顔は青ざめている。

パン！

思い切り腕を引き、バックハンドの平手で頬を打つた。

「しつかりしなさい。アンタは子供たちのヒーローでしょう？ アンタが、あの子達と助けたんでしよう？ アンタがしつかりしなくてどうするのよ」

「そんなの、知ったことじやない」

レリイゼの頭に疑問符が浮かぶ。

「第一、俺はヒーローなんかじやない」

「……どうじうこと？」

「オレも以前、この町に居た連中の一味だ」

「それって」

「ああ。裏切ったんだ。使役されていた奴らに声をかけ、利益をむ
さぼっていた連中を殺し、追い出し、利益を独占しただけだ。ただ、
頭の首がすげ変わつただけなんだよ。ギルはそのときに追い出し
た当時のボスだ。オレがこの町に居ることを知つたら必ず復讐にく
る……」

「それでも、あの子達は、貴方を頼りにしている。だから、貴方は
ヒーローよ。今までずつとこの町を守つてきたんだじょう？ あ
の時に私に向けた銃口はなんだつたのよ」

しかし、ジイスはあざ笑うように答えた。

「そんなもん、自分の身を守るために決まつてゐ。そりが、ガキの
ために命張つても仕方ねえ。全部、自分が生きるためにやつてんだ
よッ！ ガキ共が死のうが生きようが知つたことか。ボディーガー
ド気取りも終わりだ」

「そんな……じゃあ、貴方は、あの子達を残して逃げるつていうの
？」

「ああ、そうだ。ギルに睨まれたら生きていけねえ。アイツは裏切り者を許すようなやつじゃねえし、金になるのならすぐ行動を起こす。アイツの気性なら、もつ、ひつひつに向かってるかも知れねえ。だつたら攻めてくる前にとつとつとトンズラするに限る。ガキ共を残していけば時間稼ぎくらいにはなるしな」

そう言い、ジイスはレリイゼに背を向ける。

「……見損なったわ」

「……買いがぶり過ぎだ。それに、自分の身を守らうとするのが、なぜいけない？ 大体、こじり、当たり前だらうが。ヒーロー気取りは長生きできねえよ」

ジイスはそっぽき捨て、部屋を出る。おそらく、すぐに荷造りをし、夜明けまでに出て行くつもりなのだろう。

そして、拷問部屋には血まみれのレイブと立ちぬくレリイゼが残された。

7、臨戦

レリイゼはレイブのそばに近寄り、いつも携帯しているハンティングナイフでロープを切つた。ついで傷の具合を確認する。

「ううう……」

肋骨が折れているのを確認した時、うめき声がした。何とか生きているようだ。

「ねえ、生きてる？」

「……ああ」

レイブが弱弱しく答えた。だが、なんとかしゃべれるのなら、命に関わる傷はないだろう。

「よかつた……、立てる？」

倒れている男に手を貸す。レイブは戸惑いながらもその手を取り、何とか立ち上がった。

「さつきから、どうこう、風の吹き回しだ、よ?」

レイブが言った。からうじて聞き取れるかどうかの声。発声するのも辛いのだろうが、それでも尋ねずにはいられないようだ。

「別に、貴方を殺しても何の特にもならない。それだけ」

「……アンタ、優しいんだな」

「ただの自己満足よ。それよりも、さつさと逃げたほうがいいんじゃない? 貴方はもう裏切り者、逃げた男の報告でギィルつて奴が来るんじゃないの?」

「そうか、そうだな。すまねえ」

男は、よろけながらも部屋を出て行った。

これで、後に残るのはレリイゼだけだ。

「逃げるのが、当たり前、か」

左袖をまくる。そこには美しい肌には不似合いな、醜い傷痕がある。

その傷は、レリイゼの罪の証だった。自らの罪を、自分でナイフで刻む。それを罰とすることでレリイゼは罪の意識と折り合いつけてきた。

傷を見れば思い出す。この傷を継いだときのこと。その相手は父の仇、そいつを自らの手で殺した。

軽い引き金、今でも忘れない。

傷を見れば思い出す。初めて虎縞の傷を見たときのことを。父が殺された時のこと。

そして、最後に思い出したのは、マリエの腕、皮膚が焼け、引きつれた、無残な傷痕。

彼女の笑顔を想う。彼女は今まで辛い思いをしてきた。それが、やっと終わったのだ。この楽園を、あたたかい楽園を守りたい。

あのスープは美味しかった。あの食卓は暖かかった。久しぶりに温もりを感じた。

自分のしようとしていること、それはただの偽善、わかっている。なぜなら、マリエが生きているのと同じように、これから、町を襲

いに来る連中も生きているからだ。限られた条件で生きられるのは強い方、それならば、マリ工達が死ぬのが道理。しかし、やらせない。自分がこの町を守るからだ。それは不自然な行為、不平等な行為、アンフェアな行為。

極論すれば自己のため、エゴのために他人を殺すところのこと。それは罪だ。

レリイゼは、ロープを切ったナイフを左腕にあて、ゆっくりと引く。紅い線が流れ、鮮血が垂れる。罪の烙印だ。

罪でもいい、私は彼女を守りたい。この生活を守りたい。自分のために戦ってくれた父も、こんな気持ちだったのだろうか。父の死はすべての始まり。父が殺され、私は仇となつたティグレという男を殺した。

私の罪、それは、父を見殺しにしてしまった罪、そして、その罪から逃れたいというエゴのためにティグレを殺した罪。

父の死の再現。今度は私が父の役だ。私が死んだら、マリ工達は仇を取ってくれるだろうか。

酒はストレートに限る。水割りやローツクなんてのは酒の味のわからねえ阿呆のやることだ。

黄ばんだシーツ、薄汚いアジト。ギイルはベッドに腰掛け、角瓶を煽つた。高純度のアルコールが喉を焼く。これで多少は気分が紛れる。

まさか、あの裏切り者の糞野郎が生きていたとはな。

あの腰抜けの事だ。自分を裏切つた後、取るものを探つてさつさと逃げたと思つていたが、ふてぶてしくもあの町に居座つていたのはまったくの盲点だつた。もしも、自分が同じ立場なら、自分の『お気に入り』だけを残してガキ共などさつさと売り払つて金に代え、さつさと高飛びを決めこむ。大人数を管理するのは手間がかかるし、

餌代も馬鹿にならない。

まったく、大間抜けだ。クソッタレめ
再び瓶を煽つた。中身はもうない。壁に投げつける。

ガラスの碎ける音。耳障りだ。

まあ、いい。今、取り巻き共 強者にとりつき、おじぼれを狙
うちんけな小判鮫だ に襲撃の準備をさせている。夜明けとともに
に襲撃するのだ。

そうだ。家畜を取り戻し、あの肩野郎を血祭りにあげるのだ。

着慣れたジーンズとシャツを身に着ける。豊かな金髪は邪魔にな
らないように後ろで束ねる。いつもの格好。そういえばティグレを
殺したときもこの服装だった。

腰には手垢がつくほど馴染んだハンティングナイフ。足首には護
身用の銃 ダブルバレルのデリンジャー をくくりつける。小
口径で、気休めにしかならないが、無いよりはましだ。

銃はサブウェポン。メインはナイフだ。

夜明けまで後一時間といったところだろうか。

子供達の寝ている部屋。片端からたたき起こしていく。不満げな
視線を送るものもいたがかまわない。永遠に眠る羽目になるよりは
ましだらう。

皆が覚醒したのを確認し、状況を説明する。昨日捕らえた男が喋
つたこと。ギルという男が近くここを襲うであろうこと。ギ
ルについては不確実な情報だが、あのときのジイスの様子からす
れば、おそらく、間違いないだらう。

ギルが以前この町を支配していた男、ということは伏せておい
た。皆が動搖するのを防ぐためだ。冷静さを欠いてはことを仕損じ
る。

「わかつたよ。レリイゼさん

話を終えた時、マリエが言った。瞳はすでに指揮を取る者のそれだった。

「みんな、よく聞いて、サムとミリィ、ミックとフェイでチームを組んで、基本は待ち伏せ。足の速い男共は、囮。たぶん、子供だと思つて舐めてるはずだから。姿を見せればすぐに追いかけてくるはず。サム、ミックで、相手を分断して。狭いところに誘い出せば地の利が活かせる」

「ああ！」「任せとけ」

マリエの言葉に、力強い返事が返つてくる。こうこう荒事は今までにもあったのだろう。

「女性陣は油断して追いかけてきたところを各個撃破。相手に体制を立て直す暇を与えないようにな。私とレリイゼはそのギルつてやつをピンポイントで狙う。いいよね」

レリイゼに問う。無言のままうなずいた。

「銃は二挺あるから、ミリィとフェイがもつて。囮は危ないかもしれないけど、おそらく、生け捕りにしようとしてるから、つかまらない限り大丈夫。それから、みんな、無理はしないで。こっちがギルをやれれば、崩れてくれるから。時間を稼ぐだけでもいいよ。以上、質問がないなら、ミーティングは終わり。各自、持ち場について」

各々のチームが散つていく。下手な軍隊よりも統率が取れているようだ。マリエもレリイゼと持ち場らかじめ決められているのだそうだ。こういうときのために、あれ、ついたところは入り口付近の家屋だった。二人は中に入り、壁を背に座る。

「ねえ、マリエ」

「なあに？」

「ジイスのことは聞かないの？」

「気づいているはずだ、ジイスが姿を見せない事に。」

「え？ 別働隊の偵察でしょう？ いつもそうだもの、後は私達の

仕事」

そもそも当然といつ口ぶり。信用しているのだろう。

「……そつ」

レリイゼは、曖昧な返事を返すことしかできなかつた。

8、笑顔の銃弾

夜が明ける。

地平線が白み始める。紫色の黎明。

『町』は静寂に包まれてゐる。しかし、それは研ぎ澄ませた緊張を含む。嵐の前の静けさ。

皆、息を殺し、感覚を研ぎ澄ます。それは、狩られる草食獣よりも今まさに飛び掛らんとする肉食獣を思わせる。

マリエ、レリイゼは入り口付近の家屋に潜んでいた。

他の皆が囮となり、相手を誘い込み、分断、および霍乱する。ついで、レリイゼがリーダー格となる者を狙う。それが、マリエの立てた作戦だつた。

二人、ならんで壁に背を預け、目を閉じてゐる。無論、体を休めているだけで。眠つてゐるわけではない。意識は覚醒してゐる……。

ガチャ

『ツ！？』

ドアに手をかける音。いつの間に？ 考えるのは後だ。

瞬間にレリイゼの体は動いていた。

ドアノブがひねられ、開くまでに距離を詰める。その勢いのまま、ドアごと侵入者を蹴り飛ばした。

なすすべもなく倒れる人影。そいつが体制を立て直す前に馬乗りになり動きを封じる。

そのまま、ナイフを振るい、頸動脈を……

「レリイゼさん、ダメッ！」

「マリエの声に反射的に腕を止める。白刃と皮膚とは小指ほどの空間しかない。彼女の声がなければ血の雨が降つていただろう。ジイスの太い首であつても、レリイゼのナイフは容易く断ち切る。

「よお、ずいぶんと情熱的な挨拶だな」

「ジイス！？」

罰が悪そうに苦笑いをするジイス。

レリイゼは拘束を解き、立ち上がつた。彼ものそりと立ち上がり、わざとらしく埃を払う。

「あなた、どういう　　」

「静かに！」

物言いたげなレリイゼをジイスが黙らせる。

「今、見てきた、やつらこっちに向かつている。戦力は十五人、馬も十五頭だ。　　マリエ、俺が代わる。お前はみんなの所に行つてやれ」

といい、自分の持つ銃の片方を彼女に渡した。

マリエは、グリップを握るや、弾装部を開き、残弾を確認する。銃を使うものの癖。彼女も相當に手馴れているようだ。

「うん、ジイス、死なないでね」

「ああ。お前こそ

がつしりした腕と、か細い腕が組合ひ、離れた。彼らの挨拶だろうか。マリエは背を向けると他の仲間のもとへと走つた。

マリエの姿が見えなくなるのを確認し、ジイスは床に座つた。レリイゼもそれに習つ。先ほどと同じように壁に背を預ける。

「あんた、どうこいつもり？　逃げるんじやなかつたの？　この腰抜け」

真剣に問うレリイゼ。それに対し、ジイスは苦笑いでごまかすよう答える。

「逃げるより、戦つたほうが生き残れると思つただけだ。逃げ回るのも疲れるし、あんた、結構使えるみたいだからな。俺あアンタみたいなお人よしでも偽善者でもねえ、自分のために戦うだけだ」

「そう、まあ、いいわ」

「あつさりしてるんだな」

「別に、戦つてくれれば助かる、それだけよ。理由なんてこの際どうでもいいわ。裏切る理由がないのならね」

「そうか……、そうだな」

音が聞こえてくる。蹄の音、嘶き、喧騒。

そう、殺し合いが始まるのだ。

生きるという目的のために。

ギル率いるグループが町へと入っていく。見たところ、あまり統率は取れていないうだ。

レリイゼは窓のふちから、そつと様子を窺う。

一番後ろにいる男がギルだろう。背丈はジイスより低いようだが、その分横に広い。その体を構成するのは、脂肪ではない、筋肉である。昔、この町を支配していた過去は伊達ではないようだ。

囮役の男共を見つけると、そいつはわめき散らすように支持を出

すと、何人かが二グループに分かれ、追撃を始める。

人徳などではない、暴力による統率。周りにいる連中からは恐怖の感情が読み取れる。反乱や失敗には制裁が加えられるのだろうか。いいように扱われ、生殺与奪を握られても、強い者、能力のあるものに付き従わねば生きる術を知らない。哀れな下僕。

当の本人は、酒瓶を取り出すと、グビグビと煽り始めた。周りのチンピラに任せ、自分は高見の見物を決め込むらしい。周りに何人か残してある。ボディガード、というよりも弾丸よけと言つたほうが正しいだろう。

それはエゴイステイックな恐怖政治をしく暴君そのものだった。

やつてられんねえ……

つぐづくそう思つ。誰だつてそう思つはずだ。エゴイストで強欲なリーダー。そんな肩についていかなければ生活できなければならぬ状況。泣きたくなる。

今日も土ぼこりに紛れ、凌いでいかなければならぬ。

馬を降り、銃を抜く。目の前にはゴーストタウン。ここにガキだけで住んでいるとギイルは言つていた。ガキはいい金になる。少なくとも、しばらく、ベッドで眠れる程度の贅沢ができるくらいにはまして、今回は邪魔をする者は少ない。ローリスク、ハイリターン、絶好のカモだ。嫌でも気合が入る。ガキなんて銃で脅せばすぐに言うことを聞くだろう。ちょろい獲物だ。

息を殺し、歩みを進める。張り詰める空気。

それはあつけなかつた。

入つてすぐの広場で坊主が遊んでいたのが見えた。カモだ。さすがに俺と眼が合うと走り、路地へと逃げ込んだが、所詮は子供、速度はたかが知れている。追いつくのは簡単なはずだ。

ふと後ろを振り返る。ギイルの野郎が酒を飲みながら、顎で『行けよ』と示すのが見える。クソッタレめ。いちいち腹が立つ。

俺は無言で向き直ると、路地へと走つた。他の連中も何人か着いてくる。

小僧が消えた路地を曲がり、銃口をそこへいるはずの標的に向ける。

「いない！？」

不意の轟音。悲鳴。はめられた！？

狭い通路で身動きができず、片端から狙い撃ちにされていく。飛び散る脳漿。

充満する血の匂い。

中身をぶちまけられた、無様な骸。

気がつけば、俺は一人だつた。

「作戦大つ成つ功」

己の勝利を確信し、狙撃手が姿を現した。十五歳くらいの女の子、右手に握られたりボルバーがひどく不似合いだ。

「つてわけだから、貴方も死んでね」

黒い銃口が向けられる。死を告げる俺の死神。

やめろ、死にたくない。死にたくない。死にたくない死にたくない死にたくない……

トリガーが引かれ、ハンマーが落ちる。瞬くマズルフラッシュ。弾丸が俺の頭蓋骨を直撃し、脳をぐぢやぐぢやにかき回す。

俺の下らない生涯はこいつして終わつた。

9、炎

壁の向こうから銃声が聞こえる。どうやら始まつたようだ。ギルの周りには取り巻きが何人か残つてゐるが、こいつらは離れてく
れそうに無い。仕掛けるころあいのようだ。

レリイゼは意を決し、ナイフを抜いた。銃は苦手、まして、足首にくくりつけられている『テリンジャー』では小口径過ぎて狙撃など不可能だ。確実にしとめるには接近戦で首を搔き切るしかない。

ふと、肩に温かい感触。

その主はジイスだつた。

彼はレリイゼを押しのけると、ゆっくりと自身のリボルバーを抜いた。

『俺が殺る』

鋭い瞳はそう語つていた。過去の因縁は自分で決着をつける。そういうことだろうか。

手首を返し、スイングアウト式の弾装を開く。六発。各々の薬室にきつちりとつまつてゐる。それを確認し、弾装を戻した。

親指で静かにハンマーを起こす。キリキリと弾装が回転する音がやけにうるさく感じる。

カチリ

ハンマーが完全に起きた。後はトリガーを引き絞るだけだ。肘を窓枠に当て、固定する。奴は……気づいていない。ゆっくりと拳銃を降ろしていく。

照星が照門と合う瞬間。ジイスはトリガーを引き絞った。

ハンマーが弾丸のプライマーをたたき、火薬が爆発した。純戦闘用の大口径弾が空の薬莢を残し、ギイルに向かつて猛進する。

弾丸が肉に食い込む音、悲鳴。

しかし、ジイスがもらしたのは「畜生ッ」という悪態の言葉だった。

ギイルはジイスの方を向き、不敵な笑みを浮かべていた。血を流し、弱弱しく痙攣する男の影から。

文字通り、ジイスは取り巻きを弾除けにつかつたのだ。

ジイスはそのまま何発もトリガーを引いた。しかし、ギイルは人を盾にこれを凌ぐ。着弾するためにつめき声が聞こえ、それは男がまだ生きていることを示す。

彼は用無しとばかりに絶命寸前の男を蹴り飛ばし、銃を抜き応戦する。周りの連中も続く。今度はジイスが窓の下へ伏せなければならなかつた。

奇襲は完全に失敗した。

「すまん！」

弾雨にさらされながらジイスはレリイゼに詫びた。そうしている間にも窓枠は弾丸に抉られ、破片が舞い散る。

「別にいいわよッ！ 死ぬときはアンタも死ぬんだから！」

レリイゼが窓枠から手だけを出し、デリンジャーを撃つ。気休め程度の牽制だ。

ジイスはそれを見、足首をめぐると、くくつてあるリボルバーをはずし、レリイゼに投げて渡した。

「下手糞でも牽制くらいはしてくれよ

「あなた、何挺持つてるのよ？」

「俺は臆病なんだ」

呼吸を合わせ、二人で何発か連射する。一瞬、相手の銃撃が止んだ。

その一瞬で窓から外を覗いた。向かいの家屋へ入り込む姿が見える。撃ち返されないうちに首を引っ込める。

障害物に隠れての撃ちあいでは、双方ともに身を守るのが容易い。つまり、決定打を与えてくる。

持久戦……か。相手のほうが頭数が多い分有利……。何とかしないと……

レリィゼはディスの拳銃を握り締めた。

ギイルはイラついていた。よりもよつてあの裏切り者に命を狙われるのは……。あんな屑野郎など、さつさと片付けてしまったいが、この状況ではそう簡単に事は進まない。

どうしてこんな肩のよつた町一つ満足に制圧できないのか。この、役立たず共め。

先に到着したやつらも応援に来ない。ガキ共に殺られたのか。能無しはこれだから使えない。まともにできる仕事は弾除けくらいだ。

「……くそったれめ……」

酒を一口煽り、あたりを見渡す。特に武器になりそうなものはない。いや。

ギイルの眼が留まつた。

壁の棚にならんだ高純度の酒。昔、自分が集めたものだ。思わず

口元が歪む。

ツイてるぜ。まだ、運が残つていやがる。

「お前ら、手伝え！」

窓越しに応戦している連中を怒鳴りつけるや否や、ギイルは自身の服を引き裂き、酒瓶の口に押し込み始めた。

酒は燃える。そして炎は武器になる。

「妙だな……」

「そうね……」

レリイゼ、ジイス共に違和感を感じていた。先ほどまでと比べ、応戦が散発的になつたようだ。弾薬が切れたのだろうか？ いや、時間の感覚はわからないが、切れるなら人数が少ないこちらが先だ。とすれば、なにかの策だろうか。

わずかな思考。攻めるか、守るかの一瞬の逡巡。その間に勝負は決まる。

窓から相手を窺う。不意に弾丸以外の物が飛んで来る。それは炎の固まりに見えた。放物線を描き、レリイゼ達が隠れている家屋の周りに当たる。それは外れたというよりもわざと外したようだ。

着弾したところから火の手が上がる。 まづい……

「火炎瓶、だな。火責めにしていふりだすつもりか……」

ジイスが苦々しげにつぶやく。火の回りが早い。相当数が投げ込まれている。

この家屋は未だ無事だ。しかし、それが奴等の狙いなのだろう。まず、逃げ場を無くすと同時に、逃げる獲物を追い込み。時期が来たところでここに火をつける。炎に巻かれて焼け死ぬか、逃げ出したところを待ち伏せに会い、蜂の巣になるか……。それが連中の書いた筋書きだらう。

何かが崩れる音。どこかの建物が燃え落ちたようだ。額に流れる汗は炎の熱によるものだけではない。

不意に裏口の扉が開く。

二人は反射的に銃口を向ける。

「あたし達だよ、お一人さん」

入ってきたのはマリエをはじめとする。子供たちだった。幸いにも全員、無事だ。

「よお、お前ら。生きていたか」

「ディスが言った。皮肉じみた言い方。ふざけ半分。

「ディスの兄貴こそ」「悪い奴程長生きするんだぜ？」

子供たちが口々に言い返す。こちらも、冗談を言いつような口調だ。笑いたくなる程、絶望できな状況という事。

「ほら、挨拶はそのくらいにして、この状況を何とかすることを考えましょ」

マリエの言葉で皆の瞳が真剣に戻った。どんな状況であっても、最善の手を尽くす。絶望など無意味だ。そうやって今まで生きてきたのだろう。タフな子供たちだ、と思つ。

「……そうだな、お前ら、銃は？」

ディスに言われ、狙撃役を受け持つた者が各々銃を差し出す。レリイゼが睨み付ける。

「……畜生め……、なんか……なんかねえのか？」

炎の中に活路を見出す。という手もないわけではない。しかし、炎は町のほとんどの建物を飲み込んでいる。おそらく、の中には有毒ガスが充满しているはずだ。火災で最も怖いのは炎ではない、それによって発生する気体だ。致死量は要らない。ほんの少し、行動不能になつたら最期だ。意識が途切れた後、炎で死ぬか、ガスで死ぬか。どちらにしろ行き着く先は一緒だ。

また、子供らがここにいるということはすでに退路は断たれていることのことだ。そうでなければ、わざわざ、危険な場所にとどまる理由はない。

しかもジリジリと状況は悪化していく。

そんなハ方塞りの状況。

救いの手は意外なところから差し伸べられた。

「困つてんなら、助けてやるつかい？」

嘲りの混じつた提案。

声の主は、ギイルだった。

9、ケジメ

声は続く。

「俺はなア。別にお前らを殺すのが目的つてわけじゃない」

君の悪い猫なで声。

「そこ」のジイスつて薄汚え裏切り者の頭、ぶち抜け。そうすれば助けてやるよ」

「裏……切り……者？」

マリエの呟き。

「言つな！ ギイル」

「その声……マリエか。まさか、ジイスと一緒にだつたとはな。懐かしいなア。ちょうど、おめエの悲鳴がききてエと思つてたんだよ」

銃声。

マリエが撃つた銃弾がギイルの家屋にめり込んだ。

「五月蠅いッ！」

「そう、カツカするなよ おめエがどうこうつもりかは知らねエが、ジイスはもともとは俺んトコの下つ端だ」

「嘘よ。だつてジイスは私を助けてくれたよね。ね、そりだよね？ ジイス」

マリエの問いにジイスは黙したまま答えない。

「まあ、そいつみてエな下つ端にや、女抱いてる余裕なかつただろうからな、おめエが知らねえのも無理はねえ そいつあな。散々悪い事をやつたあげく、善人ぶつてのうのうとお前らと生活してたんだよ」

「やめるー！」

ジイスが叫んだ。しかし、その叫び声はどこか弱弱しい。

「やっぱり、そんな裏切り者は生かしておけねえよなあ。だから、そいつを、俺に見えるようにぶち殺せ。そうすりゃ全員助けてやるよ。考えるまでもねエ話だらう！」

マリエの右腕がゆっくりと動く。

「本当？ ジイス？」

彼は黙つたままだ。真剣なマリエに、誰も口を挟む余地はなかつた。

「そう……」

マリエはその沈黙を肯定と受け取つたのだろうか、弾装を振り出し、残弾を確認すると、ジイスの額に銃口を向ける。

「どちらにしろ、ジイスだけで済んだら安いもんだよね

「待てよ、マリエ！ やめてくれ。撃つな

ジイスの歯がカタカタと成り始める。

「ねえ、本当なの？ 正直に答えてよ」

マリエは改めてジイスに問つた。無表情のマリエ、対照的に、ジイスの怯えた顔。

「ああ、そうだ！ 本当だよ。俺はあの口、ギイルを裏切り、この

町を奪つた！」

自暴自棄気味な独白。

「そうだ、あんな奴に俺の命を握られるのが嫌になつたんだ。騙したつもりは無かつた。いまさら、のうのうと暮らせる身分じゃないのかもしれない……。だが、俺はもつといい生活をしたかった。もつと安定した生活をしたかった。そつ思つのがそんなにいけないことなのか？」

「それで、全部？」

マリエの親指が動く。ゆっくりと、しかし、確実にコッキングする。

カチリ

ハンマーが起きた音。

「マリエ、ダメ！」

レリイゼがマリエを止めようとする。しかし、マリエの人差し指が引き金を引くほうが早かった。

蘇る腕の痛み。熱さ。

自身の悲鳴

男たちの笑い声

死にたい

そう思つたことは何度もあつた。

死にたくなるほど痛くて

死にたくなるほど辛くて

でも、そう思つたび、想いを振り落つた。

死んでたまるか

あたしは生きるんだ

生きて、自由を手に入れるんだ。

そのためにはなんだつてやつてやる。

たとえ、

汚辱にまみれ

泥水をすすり

小石を食らおうとも

あたしは絶対に幸せを手に入れるんだ。

虚しい音が響いた。

力チン、という乾いた音。ハンマーが空の弾薬を叩いた音だ。残弾を確認した際、抜いたのだろう。

「なんてね」

ジイスは腰を抜かしへたりこんだ。

「今、ジイスを殺しても何にもならないものね。大体、ジイスを殺しても、どうせあたし逮捕まって、こき使われるんでしょう。だったら、徹底抗戦しかないよ」

過去の因縁を挟まない。クールな思考。

「ということで、交渉決裂。 ほら、ジイス。 せつせと立つてよ。情けないよ」

「あ、ああ」

そう言い、ジイスに手を貸すマリエ。

「ガキ共は傷物にしたくなかったんだが……。 そういうことならしかたねエやな」

ギイルがそう告げるや否や、火炎瓶が雨のように投げ込まれた。床に当たり、瓶が割れるとともに、酒が飛び散り、火が回る。

さほど大きくも無い建物だ。瞬きほどの間に炎は天井までを飲み込む。消火は絶望的だ。

熱い。焼かれた空気が皮膚をじりじりと焦がす。そのうちに柱が焼け、建物が倒壊するだろう。そうなれば、終わりだ。

生きたまま丸焼きにされる豚の心境。このままでは確実に焼け死ぬ。

それなら、打つて出る、か。

ふと、左腕の傷が目に入る。

すべての始まりは、父の死だった。父は自分のために死んだ。

そのとき、レリイゼは罪を負い、購いの生を歩み始めた。父は私のために死んだ。なら、私も……

「私が、出るわ」

こんな状況で打つて出ること、それは死を意味する。

そうだ。死ねばいい。死ねば、罪も罰も何も無い。

「そんな、自殺行為だよ」

マリエが言った。もつともだ。

ここにいたつて同じでしょう？ 私、脚の速さには自信があるの。
だから、今から、向こうに走りこんでギイルの首を取つてくれる
「そんなの、できるわけ……」

「ギイルを殺るのは無理でも、奴らの注意を引き付ける事くらいは
できる。その隙に脱出して、多少は逃げやすくなるはず」

レリイゼは笑みを作つてみせた。もう、覚悟は決まつている。

「これが一番マシな方法だと思うの。だから」

レリイゼはもう一度、笑みを作つた。それで、マリエは何かの意
味を汲み取つたようだ。

「わかった。行こう。みんな」

他の皆も反論があるようだが、マリエに従う。

「ちょっとまでは」

ディスだつた。

「俺も行く。ギイルの野郎をこのままのそばらせて置けるかよ。せ
つかくだ、ここでケジメをつける」

「わかった。気をつけて」

マリエが言つた。レリイゼとは違い、反論はしない。それだけ信
用があるのだろう。

「おう。そつちこそな」

他の子供達も口々に無事を祈る言葉をかける。ディス、レリイゼ共
に笑つて言葉を返した。

「じゃあ、行くわ」

レリイゼは愛用のハンティングナイフを引き抜く。

「おう」

ディスは短く答え、一挺のリボルバーを引き抜いた。

一人は、マリエ達に背を向け、建物の正面玄関へと歩き出した。

ディスはリボルバーの弾装を開き、弾丸を押し込む。右と左に合

計十一発。

「ねえ、あなた。なんでこんな役を買って出たの？ あの子達と一緒に逃げても良かつたのに」

「ふん、あんなダサいトコみられたんだ。ちょっとはカッコつけさせり」

「格好付けて死ぬつもり？ 本当の事言いなさいよ」

「だから、言つただろう。ギイルだよ。この先、あんたみてえなと組めるチャンスは無いかもしれないからな、今のうちにアイツにとどめを刺しておいたほうが安心できるってもんだ」

「ふうん。まあ、そういうことにしておこうかしら」

「あんたこそ、どうなんだよ。『まかすな。わけわかんねえよ』

「別に、ただの罪滅ぼしよ」

「はッ、死んで購うつてか？ 死体はなんにも言わねえ。生きてる奴が勝ちだぜ？」

ジイスは嘲るよに笑つた。それが、ここでは普通なのだろうか。

「あんたにはわかんないでしょうね。いいのよ。私が死ねばそれが『ケジメ』になる。私のね。もう一つ質問、いいかしら？」

「ああ」

「あんた、ホントに何挺持つてるの？ 重くない？」

「企業秘密だ……」

ジイスの手がドアノブにかかつた。互いに顔を見あい、呼吸を合わせる。

そして、ジイスが扉をけり開けた。

同時に彼が弾をばら撒く。もとより、命中精度など必要ない。ただの乱射でいい。少しでも牽制になればいい。

相手が怯んだ刹那、レリイゼが奔り出る。

左腕を前にかざし、急所のみを守る。後のことなど知らない。ギイルのところまで行き着ければそれでいい。

ターゲットを視界の中心に捕らえ、疾駆する。

弾雨が途切れたのはわずか一瞬。前方から銃弾が撃ち返される。

ジイスも撃ち帰すが、抑えきれるものではない。

レリイゼは銃弾など気にも留めない。

左腕に食い込む熱い感触。貫通し、骨ごと抉られる。続いて腹部。鉄の味がこみ上げる。

しかし、彼女は止まらない。

奥歯が割れるほどかみ締め、耐える。ただひたすらに前へ。どこに何発当たったのか

体が痛いのか熱いのか

もう、何がなんだかわからない。

身体のことなど知らない、知ったことじゃない。

重要なのはターゲットの間合い。

ギイルの首が射程内に入つたことを確認し、跳ぶ。奴が銃を構える。

遅い。

すでに間合いはナイフ。銃弾はレリイゼの髪を掠めただけだ。そしてナイフが首筋へ……

ふと、視界にギイルの瞳が入つた。

最期の瞬間。暴君は、微かに笑つたように思えた。

それは、因果応報の諦めの笑みか、それとも、開放の喜びの笑みかそして

鮮血の花が咲いた。

床、体、視界。全てが紅に染まる。血の雨。

ギイルの首が舞い、残された身体は糸の切れた人形のように、ゆっくりと崩れ落ちた。

それと同時に、レリイゼの身体が揺らいだ。深紅に染まつた身体は返り血か、自らの血か。

ゴボリと彼女の口から血が吹き出る。口の端から血が流れ落ちるが、ぬぐいもしない。

次の標的へ向かい、地を蹴る。

だが、脚に力は入らず、血溜りの中に無様に崩れ落ちた。

身体に力が入らない。痛い？ 热い？ 苦しい？ よくわからな
い。

意識が紅に呑まれていく。死へと墜ちていく。
意識の欠片が最期に想つたのは
マリエの悲しむ顔だった。

10、答え

いつかのベッド、レリイゼは痛みに眼を覚ました。
死んでもいい、いや、死ぬべきだと思つていた。しかし、死ぬわ
けには行かなかつた。

そうだ、マリエは私だ

自分が死ねば、マリエに自分と同じ罪を着せることになる。それ
はしてはならないことだ。

それは、死にたくないという自分のエゴを裏返したものでしかな
いのかもしれない。結局のところ、罪だの、罰だのと自分だけの言
い訳に過ぎないのかもしれない。

『ねえ、あなたも、こんな気持ちだったの？』

自分の手で殺した。左腕の傷を受け継いだ相手に對しての言葉。
言つてから馬鹿なことを言つたと思つた。その男は、もうこの世界
にいないのだ。それこそ、自己満足に過ぎない。

身体を起こす。全身の痛みに身を竦める。この間と同じように、元通り、
やっぱり裸だつた。ただし、今回は体中に服を着なくともいいぐら
いの包帯が巻かれている。

左腕を、痛みをこらえて持ち上げてみる。やはり、白い包帯で隠
されている。その下にあるはずの傷は今は見えない。

コツ、コツ

ドアがノックされる。

「どうぞ」

声を出すのが予想以上に大変だった。おまけに、自分の声とは思えないほどしゃがれた声だ。

スープをトレーにのせ、入ってきたのはマリエだった。

「レリイゼ、眼が覚めたの？」

マリエは起きているレリイゼを見るなり、ぱたぱたと走りよつてきた。スープをそばに置くと、そのまま抱きつぶ。無論、傷だらけのレリイゼはたまたものではない。悲鳴が出るほどの痛み。だが、悲鳴は堪え、「ちょっと、痛いわよ」とだけ言葉にした。

「心配したんだよ。みんな、心配したんだよ。銃声が途絶えた後、倒れてるところを見つけて、無事な所見つけるくらいボロボロだつたんだから」

マリエは泣いていた。

「そう……」

「『そう』じゃないよ！ まったく無茶なことして……」

マリエは自分のことのように泣きじゃくる。せっぱり、暖かいな。とレリイゼは思った。

「そういえば、ジイスは大丈夫？」

「うん、生きてるよ。レリイゼと違つて、脂肪、筋肉たっぷりだから、全然、軽症」

確かに、身体だけは立派な男だ。やつてることは貧相であるが。だが、それを責める事はしない。生きるためにしていることだ。

「そういえば、なんあの時、ジイスを撃たなかつたの？ なにか、納得できないんだけど」

なんとなく、聞かなければいけない気がして、レリイゼは改めて聞いてみた。

「裏なんてないよ。『殺しても意味が無い』ホント、それだけ、あたし、殺さなきやいけない人は絶対に殺すけど、どうでもいい人は殺さないの」

マリエはそんな台詞をあつけらかんと言つた。

「でも、ディスは、以前貴方を……」

「そんな昔のこと、別に関係ないよ。実際の主犯はギルって奴みたいだし、復讐なんてやつたって意味無いじゃない？ そんなことより、自分の命や幸せの方が大切だよ。あたしは、自分が生きるためになんだつてやる。……つて、当たり前じゃない？」

「そう……かもね。」

強い子だな

以前、マリエが自身の醜い傷跡を見せ、過去を語つたことを思い出した。

自分は、過去の罪を贖うというHIGのため、ティグレを殺した。

そう、ティグレは無意味に死んだのだ。

拳句、死という逃げ道を選ぼうとした。そう、死は逃避でしかない。

マリエも何人も殺している。しかし、それは『生きる』という目的のためだ。

そして、同じ目的のため、ディスを殺さなかつた。過去の殺意を振り切つたのだ。生きるために。

生きるために殺し、生きるために食らう。生きるために、生きる。

それが私が求めていた答えなのかもしれない

ふと、窓の外へ眼をやつた。

すでに町の再建が始まつていた。燃え落ちた建物が撤去され、新しい柱が子供たちの手で建てられる。ディスも作業をしていた。やはり、包帯に巻かれ、顔をしかめている。

レリイゼの顔に思わず笑みがこぼれた。

「ほらほら、せつかくスープ作つたんだから、冷めないうちに食べてよ

窓の外から視界を戻す。マリエがスープとスプーンを手にスタンバイしている。そのまま、『あーん』とやりたいらしい。

「はい、あーん」

レリイゼは赤面しながらスプーンを差し出されるまま口を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7488e/>

楽園の引金

2010年10月13日03時42分発行